

# 中学校B アフターコロナへ向けた授業実践

窪田 一城 (印旛)      奥山 利彦 (柏)      湯浅 新也 (山武)      菅谷 旭 (東総)  
小沼 隼人 (葛北)      山来 智志 (香取)      森 千夏 (葛南)

## 1 はじめに

本グループでは、コロナ禍での授業実践の経験を踏まえて、コロナを言い訳にしないアフターコロナへ向けた授業実践について考えることから話し合いをはじめた。中でも、コロナ対策を踏まえて、低下した体力を向上させることと各単元で扱いづらかったグループワークや話し合い活動をベースに研究することにした。

## 2 実践例

### (1) 陸上競技：短距離走(リレー)

バトンパス練習のなかで小グループをいくつも作り、各グループにICT機器を1台用意してバトンパス練習の際に活用した。目標として、「自分に合ったマークを探す」をテーマに掲げ、「最大利得距離」や「スピードに乗ったバトンパス」をポイントにアドバイスや話し合い活動を取り入れて授業展開をした。

#### ○ 陸上競技での補助運動

- ① 肉離れ予防のストレッチ
- ② 肩甲骨や下半身の可動域を広げるストレッチ
- ③ ビートランニング(アップテンポな曲に合わせたステップやダッシュ)  
ビートランニングでは、地面を蹴る動作や短距離に繋がる動作を取り入れた。

#### ○ バトンパス練習

1グループ3～4人でバトンパス練習(2人)、撮影・アドバイス担当(1～2人)を交代で行った。技能の向上確認として、グループ対抗70メートルリレーを行った。ICT機器で撮影した映像を見ながらアドバイスを行うことで、自分たちのバトンパスを確認することができ技能の向上につながった。



### (2) 球技：バスケットボール、ハンドボール、バレーボール、ソフトボール

球技では、「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」3種類全てで授業展開した。運動量の確保のために集合の回数を減らし、話し合い活動も内容を「声かけについて」「連携について」「技能について」など要点を明確にした。グループワークでは、ICT機器やホワイトボードを用いて、毎時間ゲーム前後に作戦会議の時間を設け戦術の確認や試合の振り返りを行った。運動量を確保するために、試合間の話し合いは30秒～2分程度にするなどの工夫もした。

○ 団体種目におけるグループ編成での配慮

教師主導で技能別の異質グループを編成した。理由として、同位グループだと得手不得手により技能面での差が歴然となることや、話し合い活動においても苦手意識のあるグループでは意見が出づらくなってしまふことが挙げられる。

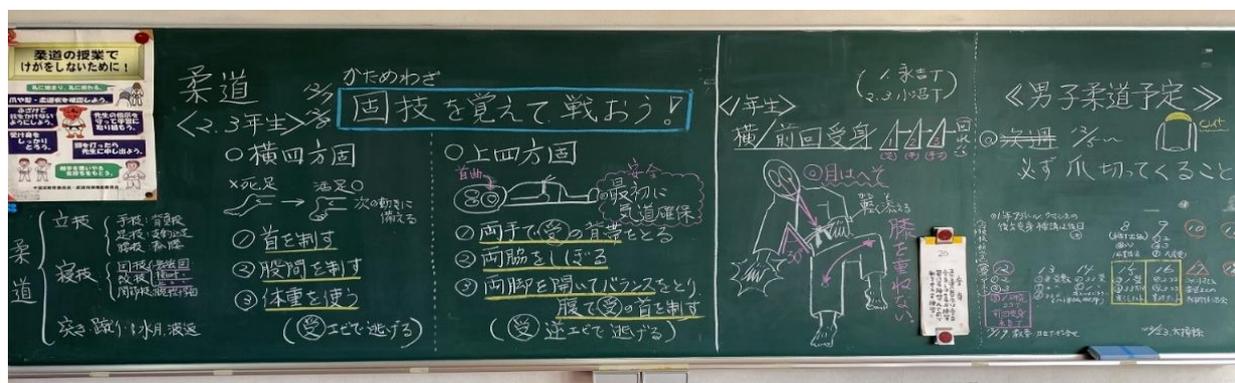
○ 球技での補助運動

- ① 基本的なドリル練習
- ② ゴール下シュート
- ③ 直上パス
- ④ 3段攻撃を意識した3人組パス
- ⑤ キャッチボール(ゴロキャッチ、フライキャッチ、クイックスロー、ピッチング、ボール回し)



(3) 武道：柔道

昨年度まで、礼法、受け身やエビや逆エビなど1人で行い、ペア学習は行わなかった。今年度は、マスクを着用したまま寝技・固め技、立ち技の触り(大腰)までを行った。グループワークの方法としては、ポイントを板書したものと画像を提示し、ICT機器で撮影したものを確認させ、技能習得を図った。



3 まとめ

(1) 成果

今回の各校での研究を通して、ICT機器やホワイトボードを用いた授業展開や話し合い活動を行うことで技能の定着やグループワークを円滑に行うことができた。具体的には、動画で視覚的に確認したり、他者と話し合っって協議したりすることで課題が明確になりやすい。また、自分の動きを直接確認することは技能の向上に有効であった。

(2) 課題

コロナ禍で、活動制限があったこともあり生徒の体力は確実に低下している。体力の向上を目指して授業は進めているが、体力を高める運動や話し合い活動を毎回取り入れていくと主運動の時間の確保が難しくなる。話し合い活動と運動量の確保をバランスよく両立する難しさを改めて感じた。